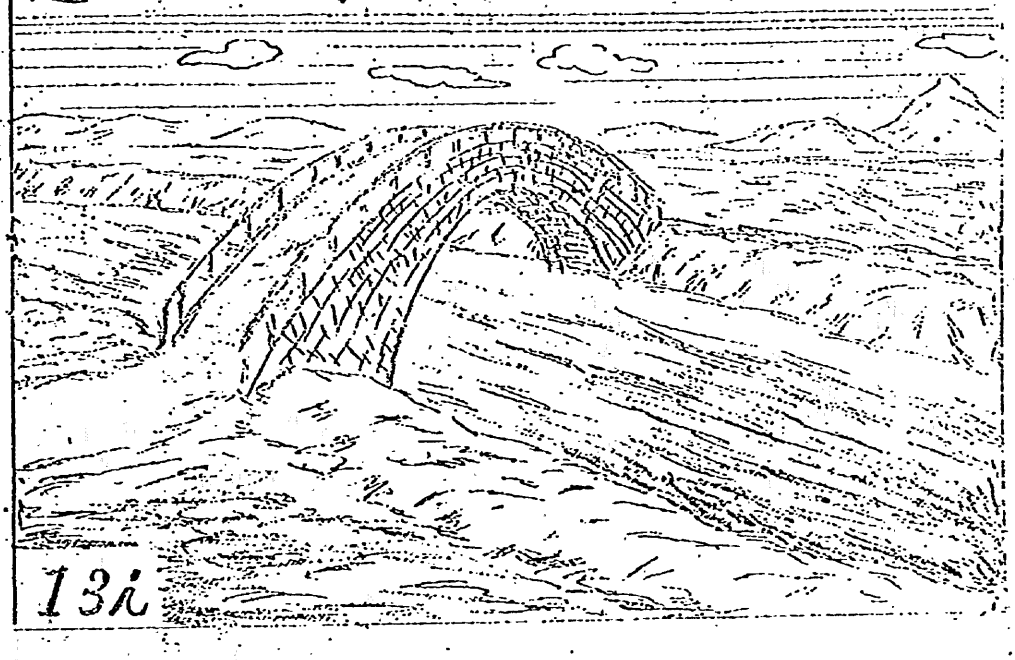
蘇州河附近より南京への轉進



13八

目次

蘇州河の戰鬪から　暗夜の部隊追及　四　歩兵伍長　加惠德雄

痛快な邀撃　七八　歩兵軍曹　荒木賢一

崑山より　南京まで　一〇　座談會

蘇州河　血染の握り飯　五五　歩兵軍曹　倉本信市

戰跡を見つゝ　嘉善へ向ふ　七　歩兵軍曹　渡辺光也

死体の浮いた河水で　飯を炊く　五五　輜重兵上等兵　甲斐孝道

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

蘇州河の戰鬪から
暗夜の部隊追及

歩一三ノ四

歩兵伍長　加惠德雄

一列兵にしか過ぎなかつた私の見分記憶には誤つた點も多からうと存じます　豫め左樣御承知の上お許を願ひます

敵の退路を斷つ爲めでありませう　我が部隊は夜に日を次いで　文字通り息つく暇もなく急追を續けました

大隊の尖兵が蘇州河の半里手前に進出した時　敵と遭遇して戰鬪を交へました　早速我中隊も第一線增加を命ぜられ　一同勇躍前進　道路より約千米の竹藪のある部落の敵を攻撃しましたが　浮足たつた敵は何等抵抗もせず河の線へ逃げて行きます　逃げる敵を追つて蘇州河に進出して見ますと下流地域の方面田圃は　上海方面から逃げて來る敵の部隊で眞黑です　我が部隊が先に廻つてゐることを未だ知らないのです

「撃つな〳〵　充分引つけてから　一度に撃て」

井藤中尉（當時少尉）殿が注意をして居られますが　この大敵　而も有利な目標を目の前にして　じつと我慢しては居られません　氣がじり〳〵　焦つて參ります　輕機が眞先に火〳〵〳〳と火を吐きました

それにつれて小銃も　重機も　擲彈筒も一斉に物凄い勢ひで撃つて〳〵　撃ちまくりました

重機等は私のすぐ横まで進入して來て

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

猛火を浴せておりました
バタ〳〵倒れる様が手に取る様です　右往左往して應戰する余裕もないらしく　白い田が忽ち黒い人の山に変つて行きます　實に痛快でした
この時吾小隊の一分隊は小隊長指揮の下に渡河を開始した　小隊長殿が眞先に向ふ岸に渡られました
すると今度は發動機船を先頭に　何十隻と言ふデヤンクの群が　蘇州河を悠々と上つて來るではありませんか
正に退路を水路に求める敵の集團です
先頭の船は已に三百米に接近しておりました
「撃てッ」
の號令で　今度は兩岸から一斉射撃です
驚いた敵はバツタの様に河に飛びこみます
渡河した一分隊の軽機射手　増田上等兵は
それを撃つ約五十米の地點まで接近して

猛射を浴せておりましたが彈が盡きて
「おい彈　彈」
と振り返つて叫んだ時　死物狂に船中から射つた彈に　左肩を貫かれてバツタリ倒れました
増永に彈藥を届けようと飛び出した彈藥手も　無念大腿部を貫通され打ち倒れました
之に噴怒した戰友達は一兵も殘さじと　水中の敵を完全に全滅して心から快哉を叫びました

× × ×

大隊の渡河が終り人員點呼後　大隊は更に追撃に移りましたが　第三第四分隊十八名は二人の負傷者を運搬する為めに　三分隊長真原伍長殿の指揮で　最後尾を追及することになりました
一擔架に四名　人員は二回交代分しか居り

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ません　而も分隊長二名は後方警戒で最後を續行します　支代員は皆銃を二銃づゝ肩に裝具等も持つて居りますから　戰鬪力を甚しく阻害されてゐると言へませう

四辺は既に真暗です　畫間の敗殘兵は至る處に隠れてゐます　大隊との距離は増すばかりで早や其の行進方向さえ判らなくなりました　路は漸く一人歩きの出來る位いの小路です

途中でクリークから飛出した三名の敗殘兵を處分してゐる中に　時間は段々經つて本隊と全く離れて仕舞ひました

漸く四尺位の道路に出た時は一同ホッとしました　この道路を本隊は通つたに違ひないと　道路を右にとり段々進むうちに　前方に黒く大きな市街らしい建物が現はれました

一同蘇生の思ひです　町の入口に差しかゝつた時　佐川長等兵が

「アッ　支那兵だ」

と言ひもあへず飛びついて行く　前田上等兵が日本刀をさつと振りかざした

支那の歩哨は声も出さず　大地に倒れました

「さあ　ぐづ〳〵しては居られんぞ　早く早く」

と真柔分隊長殿の指圖で　戰火に焼かれた町を左へ突き抜けようと急ぎましたが　家が壞れてゐて行き止りになつてしまひました

支那特有の眼鏡橋のところにたどり着いた時　真柔班長殿が意を決したのでせう

「おい第四中隊　四中隊は居らんか」

と大声で呼號りました　すると橋の向ふに突然不氣味なざはめきが聞えます　真柔班長殿が橋上からころがる様に飛び下りました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

た

「敵だ　敵だ　五六百名居るぞ」

「ぐづ〳〵して居ると全滅だ　擔架は後へ退れ　早く〳〵」

とせきたてます

警戒をしてゐた竹川上等兵が　橋上を組つてパン〳〵と撃ちました　續いて班長殿が撃ちました

小敵とあなどつて敵は橋上に飛び出して來たのですが　最初の二三名が打ち倒されて河に轉落したのに氣をのまれて　出撃しては參りません

今の中だと言ふので擔架を急がせ　後方を警戒しつゝもと來た路を一散に駈戻りました

無我夢中の急遽擔架は破損する　重傷に苦るしむ兵には申譯ないが時が時修理する暇もない　一人が折れたところを捨つて闇夜の敵地を脱出したのですが　幸ひ闇の中で補生計大尉殿にお會出來て　高木分隊長殿の命で私が傳令となり　漸く本隊との連絡がとれ　全員無事小隊に收容された時はうれしなみだがこぼれて仕方がありません

でした

痛快な邀撃

歩一三八七

歩兵軍曹　荒木賢一

十一月十一日我が岡本(係)部隊は青浦を通過し　崑山附近の敵を撃退する任務を以て進出する途中情況変化して　三家村に到着しました

一九〇〇頃附近には人影も見えず　只話声が微かに聞えて來ます　中隊長殿が各小

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

隊長殿を集めて敵情を話されてゐます 其の間中隊は戦闘準備をなし 皆命令を待つてゐました

突然小隊長殿が歸へられて 敵情小隊の射撃の指示又其の時機等を言はれ 小隊は直ちに配置に就きました 各分隊の陣地構築の器具の音が聞えてゐます

一時間後には物音一つせず 何處からともなく鳥の鳴声が聞えて來ます

分隊長殿が

「前の道路を敵の自動車が数十台やつて來る 分隊は左に小隊が出てゐるから 一小隊が射撃したら直ちに射撃する 右には三小隊 其の右の方には各中隊が道路の線に射撃準備してゐる 自動車の先頭が一小隊の所に來た時射撃だ いゝか」

「ハイ」

と言つて待つてゐますと 二時半頃微かに自動車のエンヂンの音が聞えて來ました

〃來たぞ〃

直ちに擲弾筒の引革を握り

「弾薬手 頼むぞ」

と言つて居る時 自動車群は有効射界に入つて來ました

バアツ〈

パン〈〈

ダ、、、、

重軽機 擲弾筒 小銃の一斉射撃が始じまりました 今迄静かであつた夜が火花散る戦場 と変りました

我が擲弾筒も猛射を浴せ 筒口から一条位ひビユー〈と火を吐いて飛んで行きます 二筒で射つ十発の弾は敵の真中に命中します 實に小氣味よく中ります

こうして約十五分間射撃をした頃 射撃中止の命令が來ました 今の自動車は大きな

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

姿を現して停止してゐます　そして時々人の呻き声が聞えて來ます

三時頃又も道路に話し声が聞えて來ます

そして

「快々的　々々々」

言ふ声がいやに判然と聞えるのです　と左の方から再び一斉射撃が始りました　私共も機を失せず連續射を浴せます

筒が熱くなつて握れない程です　敵はと言へば一発も反撃して來ません　物足りぬと言つたらありません　混乱した敵は友軍の位置も何も見極めず　此方に逃げて來ては殺されてゐます　又友軍と一緒にどちらも氣付かずに居たりしました

中隊は夜明と共に附近の捜索隊が出された　道路には自動車　敵死体　弾薬　兵器色々なものが道路に散乱して足の踏場もない有様です　この時軍旗一外旗を一取つて歸りました

蘇州河血染の握り飯

歩一三ノ三　歩兵軍曹　倉本信市

三家村で敵に全滅的戦果を収めた我が部隊は意気を衝く勢を以て　第三大隊を先頭に崑山へ〳〵と急追して　夕刻潮浦村に到着しました

尖兵中隊たる第十二中隊よりの報に依れば

「蘇州の橋は焼かれて渡河不能の如し又對岸には歩哨らしき者点々と見受けられ　その後方には強固なる陣地あり」

とのことでありました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

時に八二〇でありました
敵の彈丸は愈〻激しくなります　間もなく
〃第十二中隊の一箇小隊が渡河に成功した〃
との報がありました
暫くすると大隊長殿が自から來られまして
「第十二中隊の一箇小隊が渡河して敵の包
囲を受けてゐるから機關銃隊は直ぐ渡河
して協力せよ」
と命ぜられました
其處で我々機關銃中隊（一箇小隊々）は直
ちに渡河準備をなし橋のところに參ります
と　北支以來未だ見なかつた曳光彈を使用
して　橋に集中火を浴せてゐます
勇敢な小山曹長殿（当時軍曹）は
「よし　橋を見て來る」
と言つて　單身偵察に飛び出しました　四
五分もすると歸つて來まして
「通過は出來ぬが分解搬送でなければ駄目
だ」
と言ふので皆分解搬送して　指揮班を先頭
に前進を起しました
真中頃迄來て見ると　橋の一端は焼けて一
人づゝでなければ通過出來ません　暗い中
を手さぐり足さぐりで渡つて行きます　兵
隊が伏してゐます　彈は來る氣はあせる
大きな声は出されない
「おい　早く行かんか　何うした」
と　つゝいてみても返事がない　友軍の戰
死者です
「許してくれ」
と飛び越えて前進しました
中隊全員が渡河し終つたのは一九〇〇過で
ありましたが　幸に一名の負傷者もありま
せんでした
十二中隊の兵は盛んに突喊を繰返して居り
ますので　私共は直ぐ陣地を占領して　之

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

に協力しました
後方部隊もどし〳〵渡河して來ましたので
對岸の敵を壓退することが出來ました
すると敵は第二線陣地に着いて　死物狂ひ
に抵抗を試み無茶苦茶に喜つて來ます　敵
との距離は約二百米　その夜は一晩中喜ち
合つて夜を撤しました
明れば十一月十五日新手を加へた敵は、退
却の氣配もなく一層物凄く　攻勢に轉じて
參りました
私共も何に敗けるものかと　必中の信念に
燃えて之を撃します　然しなんと言つても
昨夜から食つてゐません　ひもじくて〳〵
仕方がないが　どうにも處置なしです
丁度一三〇〇頃でした　二人の兵が天幕に
包んだ荷物を背負つて　橋をまつしぐらに
駈け渡つて參ります
"危い"と思ふ間に眞中頃で一人ぱつたり倒
れました　一発でやられたのです　もう動
かうともしません
一人は無事に陣地に着きました　ピユンピ
ユンと頭上を掠める敵彈をものともせず
天幕の中の握り飯を出して分配してゐます
然し私のところまでは來そうもありません
そう思つて見てゐますと　分配終つた其の
兵は　反轉して脱兎の如く駈け出しました
橋の上に倒れた戦友の天幕を素早く擔ぐと
又猛烈な勢で私共のところに引返して來ま
した　この勇敢な行動に感動する私共に
「さあ食へ　さあ食へ」
と血潮の握り飯を渡すのでした
感激でもう胸は一杯です
その美味さ　その尊さ　は筆舌では現はす
ことが出來ません
私共一線部隊の蔭には　幾多斯様な悲壯壯
絶な物語りが秘められて居ることでせう

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

今私はそれを目撃しました　焼落ちた橋梁の橋げたの上に　打ち伏して動かぬ無名の勇士よ　御身の心盡しの血の握飯を　私は感激の中に頂きました
聖よ安かなれ　と感激と共に祈りました

崑山より南京まで

歩一三人一〇　座談會

◇嶽森曹長

中隊が輜隊か豫備隊となつて戦闘した　崑山の手前　史第塘の話でありますが　其處には幅五米　長さ八十米位の橋があり　敵が三大隊の主力と二大隊の大中隊の通過した頃燃やしたのでせう　私共が行つた時分には燃えておました

何んかこれしきと思つた敵がどつこい　仲々引かず死物狂の抵抗で　第一線も私共も急いで壕を掘り　突破の機を覗つて居た時です　斯ふ言ふ狀態ですから皆昨夜から飯も食つて居りません

取敢ず飯だけでもと携帶燃料で飯を炊き　第一線への握り飯を握りました　之を天幕に包み第一線に補給すべく川の堤防の死角に入り頭を上げて見ますと　橋の中程がブスくく燃へて居ります　それをこんなにも無駄彈をと思はれる位い喪つてゐるのです　瞬間私共の顔から血の氣がスツと引きました

私達はぢつとお互の顔を見詰め　どうしたら皆無事に橋を渡れるか　と相談しました

「分隊長殿はどぎやんすつと」

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

と言ふ短い言葉の中にも　今迫生死の間に
培つて来た親愛の情を感ずる時　私は泣き
そうになるのを大きな声で
「皆生命がけで橋をかけろッ」
と叱鳴つて素早く匍匐を清ました　一気に走
り出しました
〃よき獲物〃と思つたのでせう　俄然吠え
立てる敵の火氣が　走りながらでも解りま
した　橋のところには渡橋戦の人柱となつ
た戦友が斃れてゐます　いくら急ぐとは言
へどうして之が踏めませう　飛んだり除た
りして通りました
無事渡りましたものゝ　之と言ふ遮蔽物が
ありません　操典に示す様に砲撃の間断を
利用しては　屈伸や匍匐で五米どか十米走
り　やつとで百米位のクリークの凹地に入
り　早速麻のハンカチを剣先に付けて後か
ら来る目標にし　皆無事な顔をして大隊長

殿に報告して　ふと後を振り返り今越して
来た橋を眺めて感無量でした
任務は終へたし歩ち匍匐を定めて居ります
と　大隊長殿が
「今は危いから晩歩れ」
と言はれ　それではと突撃発起の壕堀りの
加勢をしました　二三時間でも経つてから
でせう　暮色が戦場の一角を包み始めた頃
断続的に喪つてゐた敵の火器が　然も橋梁
の附近で我鳴り立てるので　工事の手を休
めて見ますと　パチンパンと鉄骨に焦
く弾の中を　軍犬がこちらに向つてまつし
ぐらに走つて来ます
〃アッ〃と感動の叫びを上げて　私達は手を
休めて無事を祈りました　後百米　今一
息と言ふところで　もんどりうつてたおれ
た　犬は動くどうなるかと思ふ私達の期待
の中に　今度はあや左によろめきつゝ少死

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

になつて参ります
漸く陣地に辿り着いて係の兵にしがみつい
て　手入を受けて居るのを見て　理窟抜き
に泣かされました
其の夜〃闇夜の鉄砲は当らん〃と思ひつゝ
橋を渡つて帰りましたが　あの気持ちは忘
れられません

◇岩本軍曹

戦闘の合間々々戦死した戦友の火葬をして
茶毘に附すんのですが　目指南京を指呼の
間に望んで　戦死した戦友の無念を思ふ時
理論では靖国で会へるんだ　武人の本懐
と肯定しつゝも　感情的にあのほろにがい
印象は忘れられません

◇榎田伍長

その崑山の戦闘の時ですが　機関銃の小隊
として配属されてゐた下園少尉殿が負傷
されましたが　自分の傷の痛みはさておい
て
中隊長殿　下園はやられました　下園の
大失敗であります
と言はれ　自分の任務　敵情　爾後の敵情
に就いての推定　小隊の指揮者は何某軍曹
に命じてあります　と言はれ重機を預じた
ことを詫びられたのを聞きましたが　従容
たる其の態度に　武人は斯くあらねばなら
ない　と今でも印象に残つてゐます

◇高野軍曹

深水の時の寒さはとても我慢出来ませんで
した　家を焼いて暖を取り　首に羊の毛を
巻いて叱られた思ひ出もあります

岩本軍曹

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

あの時は南京に入城する前日で始めて敵の斯瓦攻撃を受けたのでありますが見る
と村川上等兵の防毒面がありません
千場隊長殿が
「持たんならダオルをくはへて死んでさやおれ」
と戯談の様に言はれたので皆吹き出してしまひました
小林上等兵は眼がラスがなく吸收缶にくらいついてゐましたが今だに眼にちらついて居ります

◇嶽森曹長

敵首都を攻略して徴発のビールや酒に豪華なる宴會を催し之で停戦講話と勝手な與多さ飛ばして居りましたが武漢を陥しこんな辺村で聖戦三年の餅をつくなんて思ふてもみんことでした

戦の跡を見つゝ嘉善へ向ふ

歩一三ノ七　歩兵軍曹　渡邊光也

連日連夜戦闘と不眠不休の泥濘難行に言語に絶する困苦と缺乏を克服して敵死闘の地崑山に入つたのは極度に疲さを感ずる十一月十六日でありました
激戦につきもの、降雨に戎衣はすつかり泥で塗りつぶした様になつてゐます追撃包圍殲滅と旺盛な意氣を以つて一路蘇州へ行くものと思つてゐた私共は十八日引返して松江へ向ふと聞き噂を綜合してみると概ね現在地迄前進して來た道を反轉迂回するやうです
直ちに各自傳令勤務の多忙な餘暇を利用し

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

して　出発準備にかゝりました
ふと先日の三家村の奇襲戦に足の踏場こそ
ない路上の敵屍体　軍用器材　砲弾薬等無
数に散乱してゐる状態が脳裏に浮びました
二日間の休養後ではありますが　尚何百貫
かの鉄の梯で両肩を押しつける様な上半身
の鈍痛と　がく〳〵音でもする様な膝頭の
痛みなど　疲労の快復する暇もなく　連日
相変らぬ無氣味な灰色の空の下で　冷寒に
一層硬直した顔で　唯黙々と長蛇の如き一
連の縦隊が動いてゐたのであります
再び三家村附近の路上に来ました　想像通
り目も口も聞けられません　青黒くなつた
敵の屍は既に車に轢潰されたのか　全く糸
瓜の腐つたのを叩き散らした様になつて
異氣芬々たるものです　其の中を夕オルで
口を覆ひ　くん〳〵言ひながら壊れかゝつ
た土橋でも渡る様な恰好で　約一里の前進

を続けました
丁度十一月十一日の事だつたと思ひます
夜に入り極度に疲労した身体に鞭打ち つ
るつる滑る暗夜の旺道を急行して　崑山に
向ひ前進中此の附近に来かゝつた時　上海
戦線より四離滅裂の状態となつて敗退する
敵は　全く盲滅法で危く友軍でさえ間違ひ
相に　黙つて列中に紛れ込んだり　幅五米
位のクリークを私達と並行して進んだり
急ぎ足に友軍に追及して来たり　滑稽では
あるが全く正氣の沙汰ではありません　こ
んなことを思ひ出して自然微苦笑が湧くの
を覚えました
無言放心状態の難行も日を重ねて　二十日
松江附近まで進んで来ました　相変らずの
降雨と寒氣に全身の感覚は鈍り　手足は硬
直して自由は利かず　靴の破れからは泥水
が入り　歩く度に足が靴の中で泳いでゐま

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

す　始めの氣持ちの惡さも何時しか覺えず全身の苦痛も口に出して言へぬ程の辛さです

午前十時松江糧秣補給地點に到着しました附近は先着部隊で大混雜です　第一第三大隊の戰友とも久し振りに會うて　汚れた顏と物凄く光る目で　互に元氣だつたことを語り合ひました

行軍途上の補給ですから　先頭から順にやるので虫の這ふ樣に仲々捗りません　道路や附近は雨水でどぶ〳〵してゐて　物を置くところも腰を下す所もありません　しよんぼり雨に濡られて一層重くなつた背負袋を　有るだけの力で搖り上げながら　一歩々々丁寧に前進して順番を待ちました

少し位い休めるものと勝手なことを考へて居たべけにむしやくしやしました　米調味品の外　僅かながら久し振りに甘味品を載き四心子供の樣に喜こび　更に泥濘に足を引摺り金山方向に向ひました

補給地のどよめきも數分の後には默々とした行軍にかへり　副官殿乘馬の足音がごぼつ〳〵と無氣味に耳を打ち　跳ね上る泥水が尻のあたりにかゝるのが感ぜられます

二十一日次の補給地金山へ先行しました

黃蒲江に珍らしくも日章旗を見せて　輸送船が碇泊してゐます

「もう此處迄船がーい」

と奇聲を上げたくなります　力強い頼しい姿です　隙間なき皇國の進軍です　瞬間苦痛も忘れる感激を覺えました

本夜金山附近に宿營かと思ひましたが　夜を徹して嘉善へ向ひました　絶へ間無く人と馬が続きます　すつかり日は暮れてから金山南端で　豫定通り糧秣補給し　憩ふ間もなく一層深くなつた泥濘を再び出發しま

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

した
所々橋や道路が破壊されて もどかしい程
慢々的行軍になり 歩くよりも突っ立って
居る間の方が余程時間がかゝります 愈々
流れの激しい寒氣が身を縮し初め 夜は殊
に身に沙みます 腹の底から冷へきって
頼りない心細さ切なさが ぐん〳〵 胸に詰
って来ます
後ろからも直ぐ傍らからも 遣場のない憤
懣が怒声となって飛んでゐます 不用心に
も腹を冷してしまひ 始終腹が鳴り不愉快
な氣分で下ッ腹が堪えられぬ程痛みます
とう〳〵 軍医殿が倒れ
「擔架を用意し四名残れ」
との副官殿の命に自分の苦痛に負けてはと
最後の氣力を絞り軍医殿のところに行き
ました
自由の利かなくなった指で懸命に準備をし
てゐる内に 限りない様に見えた縦隊も過
ぎてしまひ 行く手に微か小さく火が見え
ると言ふやうになると 淋しい静かさは辺
りを包み 自分等四人の外は何一つ見えま
せん
寒さは一層激しくなりこの慄動けなくなる
なるのぢやないかと不安にもなります
「行かう」
と一様に叫び無我夢中で擔ぎ上げて 懸命
に後を追ひました
「頼りないかぢやないか」
「いや行かう 行かねば……」
「最善まではどうしても行かう」
と足元もふらふらして後から押される様な
調子で 漸く歩いて行きました
身を切る寒氣に幾十度か硬くなったまゝ
突ッ立っては休み 突ッ立っては休んして善
善に着いたのが翌朝明るくなってからであ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

りました
街に入り宿舎に着くと同時に横になつてしまひました

死体の浮いた河水で飯を炊く

歩一三　五ノ本部

輜重兵上等兵　甲斐孝道

それは十一月二十四日のことでありました
昨日までは霰さえ降つたりして　汗や泥濘の泥水などで足も凍るやうに冷た程でした
今日は幾分天候の具合も良いやうですが
まだ〳〵行軍は骨が折れます　そして毎日〳〵事故ばかりです
此の日も事故車の補助をしながら行軍して行きましたが　宿舎迄行かない内に真暗になつてしまひました　それで宿舎より二粁も手前の部落で　菅原班長殿以下十余名で宿営することにしました
先づ飯盒炊事にとりかゝりましたが　いつこうが何んと言つても真暗です　何處に水があるやら分りません
すると誰かゞ
「おい水はこつちにあるぞ」
と呼びます
早速飯盒を提げて飛んで行つて見ますと
何やら妙な臭ひがします　然し暗くはあるし疲れてもゐるので　早く飯を食つて寝たさで一杯です
誰もがそんな臭氣など氣にも止めず　飯を炊きました　炊いた飯はどうかと言ふと醤油でも入れた様な赤黒さです　妙な臭ひがしてゐますが　腹は北山時雨です　湯を

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

入れてがツ〳〵流しこんでしまひました
そしてその翌朝のことです 米を洗ひに昨
夜の川に行きました するとどうでせう
其處だけどろんと水が淀んで 川一面脂ぎ
つてゐるのです
何んと中國兵が一人達磨の様に丸くなつて
浮いてゐるぢやありませんか 然も既に腐
敗して蛆が一杯にわいてゐるのです 異氣
芬々鼻もちならぬ程で 昨夜は此水に首を
突込んで飲んだ兵隊も居るのです
もう氣分が悪くて仕様がありませんでした
口に指を突込み上げようとしますが もう
腹には一物もありません
何時迄も〳〵変な氣分で 其の日一日飯
も食ひませんでした

× × ×

川柳

残月や煙たなびく朝仕度　野平勝男

月影にかざして母の便り讀み　堀切多作

突患に心は神になりて居り　駒崎將人

萬歳を支那人不思議もうに見　下時正義

× × ×

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

目次

馳る先進輜重 輜六ノ一 輜重兵第一大隊 正信
運搬車前へ 輜六ノ二 輜重兵上等兵 中川鶴次
燃えない新 輜六ノ一 輜重兵上等兵 松永誠一
沪水機を担ぐ 第三野病 衛生伍長 朝留き雄
隊長殿も患者の 第四野病 横手 衛生少尉
大小便の世話
英霊よ安らかに 第四野病 衛生上等兵 本田 武
臭い飯 第一野病 迫田 衛生軍曹
忘れ得ぬ 第二野病 自轉車行軍 長田 衛生軍曹
ポケットに 輜六ノ三 輜重兵伍長 赤田生吉
大麦を詰め込んで 輜六ノ三
居た 愛馬三叢だ 先崎利英
手綱中手に握り飯 輜六ノ三 岩城武雄

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

馳る先進輜重

輜六・一
輜重兵一等兵　東　正信

杭州湾敵前上陸の光景を海上から眺め　押へ切れない感激の程に　我が隊は　皇軍占領後間もない上海に上陸しました

見る物悉く破壊されて　見る影もない廃墟と化してゐる　正義に反するものへ　天の下し給ふた天罰です　すばらしいドーチカも壕も　今は空しく夕闇に残骸を無残にさらし　壁は弾丸のため蜂の巣同然です

○○部隊占領　と書かれた文字が黄昏の明りに白く読まれる　當時の苦心を偲びつゝ　上海の北方陸家宅に宿營　時機の到来を待つこと数日

十一月三十日　午後三時　進撃命令は下りました

数ある輜重の中で　先進輜重に選ばれて第一線へ弾薬輸送を命ぜられました

過重の弾薬積載のため僅かな勾配に持つて行けない　きつと今度は戦闘が激しく又急なものだらうと直感しました

くつきりと晴れた空には　鯖雲が流れてゐます

廃墟の上海を後に蜿蜒長蛇　第一日から悪道です　道路両側のクリークは　楊柳の並木を水面に写して静かに流れてゐます

一面の稲田は　刈られぬまゝに　むなしく立枯れてゐます

赤い夕陽が大きく行手の空に沈む頃　一部落につき　飯盒炊飯をして　直に夜行軍

道がよければ歩度をのばす　まるで駆足の様に早い　午前三時頃漸く目的地につく　附近は一面の田で何も無い　路上に露營する

寒さは身に沁む　薪なしの飯炊き　寒すれ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ば通ずで　稲を寄せて炊く者もある　さて
どうにかして飯は炊いたものゝ　視力のな
い夜目の悲しさ　材木と思つたのが支那人
の棺桶で　後で妙チクリンな顔をした連中
もありました
眠りもせずに夜明けを待つて出発です　昨
日より一層早い　飯が炊けず　十五分の小
休止に炊いてゐる者もある
某など水を與へながら：
「おい　うんと飲まんと歩けんぞ　折角遠
くから汲んで来たぞ　もう少し飲め」
と馬の鬣を撫で乍ら頬ずりしてゐる
「くたびれたね」
お國言葉です　さながら人に言ふやうに
しては　又脚を擦つてやる　人と馬と一体
となつて来る　これは蓋し　幾山河越え
そして共に泥土に苦しんで来た兵のみが知
る境地でせう　煙草に火をつける間も惜し
く
「さあ　草だ」　と馬の前におき
「早う食はんとすぐ出發ぞ」
馬が食ふのをみて　兵もはじめて煙草に火
をつけます
「ほんに早い行軍だ　何粁行軍だらうかね」
戰友を振り返ると
「六粁行軍より早いぞ」
「もう何里位来たかね」
無駄口も多いと行軍に疲れることは四も知
り過ぎて居乍ら　四方やまの話に気を慰め
る　しばしの小休止をもつたいないやうに
休む
午前六時に出発して一日に三度か四度しか
休憩しないで　二時間三時間も歩き詰けで
す　他部隊と一諸に混雑すると駈足で進む
「こら一方によけんか　よけんと引かける
ぞ」

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

すさまじい意気込でグン〳〵追ひ越す

金山に着いた頃は

連日の疲れで足が痛みだしてきました
金山で糧秣受領に出かけた車輛は 空手で
帰つて来た 残りの糧秣も乏しくなつてゐ
ます 朝早く飯盒の僅かの飯を食つたばか
りで 夜おそくまでの行軍に 皆ペコ〳〵
になつてゐます クリークの濁り水で炊た
色のついた南京米 それが米煮えだらうが
臭がしようが そんなことに拘泥してゐる
時ではありません
足の痛みを抑へ お互に助け合ひ 乏しい
糧秣を分けあひながら空腹を満すのでした
しかも兵器弾薬の責任を感じてゐる私達の
車輛は 前線へ送る糧秣を満載してゐまし
た
この辺から道も大分悪くなつて来ました

橋といふ橋は殆ど破壊されて渡るに渡れず
引返しては田の中に入り 又弓の様に反れ
た石橋の上を 一つ〳〵引上て進むことも
一度や二度ではない 或は一里も二里も細
道を彷ひ 又は膝まで没するぬかるみを通
ることもあれば 宿るに家もなく 道端の
寺の中にある棺桶の横に仮寝して夜明を待
つたこともありました
湖州までは前日からその夜にかけて連続急
行軍で 落伍しかける者もあり それを助
けながら張切つて行く兵 真暗の闇を手さ
ぐりで水を求め 焼けつく様に乾いた喉を
クリークの水で潤す 一人が飲めば我もわ
れもと先を争つて走つてくる 夜が明けて
みれば 三尺とはなれぬところに 敵兵の
死体が浮いてゐる 笑ふにも笑へません
湖州城内には幾百頭となく 戦傷病馬が繋
いであり 看護の兵が忙し気に一々手當を

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

してゐます　これを見て思はず
「我が馬よ　達者でゐてくれ　お前が元気であれば　俺も人に負けない様に行けるのだ　何十里もの行軍で　お前もさぞ疲れたであらうが　どうか俺の行く所までは　がんばってくれ　お前のためならどんな苦労も忍ぶぞ」
と念じ　今更ながら　馬の有難さが身に沁み　疲れも忘れて馬体をさすりました
こゝで一日休養しましたが　十分の英気を恢復することも出来ませんでした
益〻行軍は早くなる　一時間二里位は歩いて居る様です

右手に太湖を望んで

進む頃は　班でも事故馬が出て来ました
泣き出したいやうな気持で鞭を振りました
が　疲れてゐる馬は　足をつゝぱるだけで

歩かうともしません　部隊はどんく　前進して行く　もう遅れる一方です
「もう馬が歩けなきや人間で競かう　補助兵は車輛に綱をつけて引つぱれ」
と班長は命令されました　三名の補助兵は馬と力を合せて競き始めました　馬も班員のまごゝろが通じてか　力一杯で引ぱつて行きます
行けど〳〵人間の頭位の丸石を敷きつめた道路は　馬までが歩き悪さうです　私も勘から出来ない苦痛でした　足には大きなマメが出来　一歩々々毎に痛みを覚える　南京迄後何十里車輛を引ぱつて行けるかと案ぜられました
夜おそく宿営して　疲れた足を引ずつて糧秣を探しに行くのも一通りの苦労ではありません　金山を出発してからといふものは　人も馬も同じ南京米です　馬には歩の

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ムの字もなく　長途の行軍に疲れてお伴ら
南京米を煮て與へる厨当番の苦勞も　血の
出るやうなものでした
馬もうたれく南京米のため足も大きく腫れ
てゐるし　私達も足が腫れて靴が抜けぬ程
で　足裏にはマメが破れて血が滲んでゐま
す　寒さと痛みに眠れないほどです

漢陽を過ぎて

間もなく急進及の命令が下りました
「彈薬車全部前へ」
「第一線は彈薬がきれて困つて居る
一線到着まで駈足」
隊長殿は命ぜられました
彈薬車輌は人も馬も一丸となつて走り続け
ました　生死を忘れ　たゞひた走りにはし
る我々の前には　障碍位何でもありません
でした　凡そ何時間位走り続けたか判らな
い　水與の暇もなく　水筒には一滴の水も
ない　足からは血が滲み出てゐる　最後ま
でがんばるんだ　最後の勝利を握るまでの
辛抱と勇気を失つてはならぬ　これが大和
魂かも知れぬ　苦しさはお互だと顔にも出
さぬ　執つた手綱を力強く握りしめ　走り
に走る
赤い夕陽が大きく沈む頃　夕食の飯盒炊事
をする　馬の足を擦つてやる　又明日一日
の飯を用意する　大休止の時間は瞬く
うちです
又夜行軍です　体は綿のやうに疲れ果て、
ゐるものゝ　遅れてはならじと確り手綱を
握る　言葉を交す者も居ません　死体に躓
いて倒れることも度々でした
苦しさが迫つて来ましたが
「目の黒いうちは　四つん匍ひになつても
晴れの南京入城に加はるんだ」

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

たゞそれだけを望みに　山が　谷がぐるぐる廻るのを「何くそ」とがんばる　前線へ前線へどおこつたやうに進む

いよ〳〵十三日午前十時頃　誰の声か

「あゝ紫金山が見えた」

頓狂な叫びに　一斉に空をのぞめば　視力を失ひかけた目が急に夜の明けたやうにはつきりしだしました「遂に来たか」と思ふと　張りつめた気が緩みかけさうになるのを自ら叱りつける

「何くそ　これからだ　おい馬よ　もう一息だ」

胸せまる思で心から馬の鬣を撫でては亦進む　悲壯な顔も　次第に笑顔になる

目睫に迫つた南京に　誰も疲れを忘れて　ともすれば凝れかゝる馬を勵ましく〳〵急坂路も乗り越えました　南京城も早や目の前に　砲煙の中に幻のやうに見えます

紫金山の防禦線も　皇軍の猛攻撃の前には如何ともすることを得ず　今は空しくその悲くが徒に破壊前の頑丈さを偲ばせます

ほふりっ放しの敵の死体と　消えやらぬ硝煙の匂が鼻をつく　全く酸鼻の極です　それにつけても激戦の模が思ひやられます

一刻前　生死を超越して戦友達が阿修羅のやうに猛然と突撃したあの喊声が　この耳に聞えて来るやうです

午後一時頃　遂に南京に着きました　我を忘れて萬歳を叫び　馬の鬣を撫で　平首を叩くのでした

上海から八十里　最後は二日二晩に三十七里の道を歩き　輜重中隊の中で　一番乗りの栄冠をかち得たのです

遂に南京も陥落したのです　勇気と希望と非常な精神力で任務を遂行して　胸もはち

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

切れるばかりの激しい感激にふるへ乍ら
いつまでも〳〵陽焼けした顔のまゝ泥
まみれのこゝまゝの姿で 南京の火空に向
つて叫びたいのでした 現実とかけ離れた空
想の世界に在る様な現在であり乍ら それ
が正しく現実であるよろこびを……

彈藥車 前へ

輜重六ノ一

輜重兵上等兵 下川節夫

南京戦に参加した我が部隊は十二月十一日
溧陽を少し過ぎた路上で四時間程休みました
この間に夕飯をすませて 明日の昼食
までの飯を暗がりでどうにか炊き 直に出
発 溧水まで後六里といふ小さな丘の上に
着いたのが朝の九時過でした
銀の霜をとかして上る太陽は 冬のものと
は思へぬ位でした 連日の不眠の行軍で
馬も戦友も疲れて居ます 先頭が止りました
総攻撃にうつゝたらしい前線の砲声が
遠雷のやうに響いて来ます
「小休止かな」と各人水筒へを始めた時
「前線は南京の城壁を挟んで戦闘中だが
彈藥が足らんと言つて来たさうだ」
と誰言ふとなく傳はつて来ました「来たな」
と思ふと胸がどきんとしました すると
「糧秣車ハ道ヲ開ケロ 彈藥車前へ」
と通傳が来ました ガラ〳〵と隊列が乱れ
彈藥車は前につめる
「ガソリンはどうしますか」
「彈藥だけだらう 待て きいてくる」
班長は馬をとばして前に出た
「溧水マデ 体ノ続ク限リ走ルンダ」
「荷縄ヲ調ベロ」
「積載品ヲ落スナ」

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

きれ〳〵に注意が来て　先頭は早や駆け出した　その時
ガソリンヲ積ンダ車輛ハ前へ〳〵
待ってゐた通傳が来ました　私は馬を促し
すぐに流れだした車輛の渦に巻きこまれて
行きました　丁度十時でした
走る〳〵　デコボコの道を
がタン〳〵　と車輛が躍る
之が我々の戦争です
敵はどん〳〵うつのに棄つ弾丸もなくて
歯ぎしりして我々の到着を待つ前線の戦友
達のことが念頭にあるだけです　早く　一
刻も早く　倒れても之をとゞけなければ……
出足のおそかった自分は　一個班遅れてゐ
る　自分の班に追ひつきたいが　却ッテ馬
は走らぬ　日本馬班が踵を接してとんでく
る
上海を出て十有余日　毎日十里を越す行軍

それに近頃は　馬も車輛につけたまゝ
鞍さへ下す暇なく　フラ〳〵と路上に霜を
かぶってまどろむだけでした
頭がガン〳〵します　冬の陽射しでも　天
気つゞきで塵が舞ひ　喉はやけつくやうで
す
敵が道路を掘り切ってゐます　そこを両側
のクリークの水が　右から左へ　左から右
へと流れてゐます　木材を打ちこみ　藁を
敷いてありますが何にもなりません　車が
はまる　馬を働ましてやっと引き上げる
又走る
本田上等兵に追ひついた　彼は老兵です
馬は班で一番小さいが　なか〳〵元気がい
いくそ　負けるものか
走レ又者ハ車ニ乗レ
通傳が来たが　誰一人乗る者はない　日頃
はおとなしくて剽軽な本田一等兵の珍しく

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

眞劍な顔を見て　グーンと力が五体を駆り巡りました

馬も　手綱とる兵隊も　汗だくく　です

左袖でグツと顔を拭いて後につづく　息がきれる　足がひとりでにピヨコ〳〵前に出る　路はいつまでも悪い　ふらつく足を踏みしめて　馬を叱咤しながら　たゞ走りに走りました

かうして溧水の町外れで　先行部隊が集結したのが午後三時

輸送品の一部を交付すると　半煮飯をかき込んで　夜を徹して南京へ〳〵

糧秣車をはなれたゝめ乾パンがあるつきりで　残飯もなければ　米はあつても炊くどころの騒ぎぢやない

破壊橋梁を　心配しながら渡ること数回

寒さに震へ　乾パンを噛り　十三日の十時半　皇軍の威力の前には敵し得ず遂に上る

南京の街を見下す丘に立つた時　任務を果した後の喜びと安堵に言葉もなく　戦友と顔見合はせて　塵と汗に汚れた黒い顔を綻ばせました

必勝之なしふ

輜重六〻一

輜重兵上等兵　松永誠一

疲労と睡眠不足のため　愛馬に引つぱられるやうにして行軍をつゞけ　深夜の二時湖州まで後六粁といふ地に着きました

誰かゞ「もうぢき湖州だ」といふ　四周眞暗闇です

露営の命が下りました　各小隊　各班毎に野外炊飯場を作る　水飼をする

出発は六時半です　今からぐつすり寝ても

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

やっと三時間位のものです　早速戦友達は車台の下にもぐりこんで寢てしまふ
丁度その夜は私とSが班の厩当番でした
見れば既に霜がおりてゐます　汗びっしょりになってゐましたので　非常な寒さを感じだしまじた　各班の厩当番が焚火を始めましたので　自分達も薪を拾ひ集めて暖を取りました　四時半頃薪がなくなりましたので　又拾ひに行き一抱へ程持って来ました　そして焚火の中に投げ入れました
私は腰を下すため　薪を二三本尻の下に敷き　火にあたってゐました　愛馬も連日の行軍に疲れたものか　身動一つせず　たゞ時折休めてゐる足を換える音がします
前にSがくべた薪に　どうしても火が付きません　何度も二人でいぢってみるがだめです　とう〳〵我慢が出来ず　口で吹きつけるつもりで顔を近づけると　何か変な臭がする　をかしいなと思ひながらも　四五回プー〳〵吹いてみた　それでも火は矢張りつかず　変な臭だけが強くなって来ました　私は変な気持になりSに
「これは生木だね」
と言ひ乍らそれを握ってみました　外面は真黒ですが手觸りがをかしい　おぼつかない焚火の明りでよく見ると　木ではない様です
「どこから拾って来たし」
と尋ねると　真面目にその先の家の焼跡から　といふ　それぢゃ燃えない筈はないと言ひ乍ら　又吹きつけると　尚一層いやな臭がします　今度はSが
「おい　いやだね　人間の焼ける臭だし」
と言ふので　取り上げてよく〳〵みると　どうも人間の骨らしい
「これは　チャンコロの骨ではないか」

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

と言つて笑ひ乍ら叩いてみました　ポトポト　と気味の悪い音がする　突然

「おい　人間の骨だァ」

とわめきました　とたんにSは新を蹴とばした　見れば確に所々肉のついた腿から下の足の骨です　私達の騒ぎに驚いて隣の班の厩當番もとんで来ました

しばらくは呆然としてゐましたが　みれば全部が人の骨の焼残りの足や腕等で　笑ひながら捨てゝしまひました

濾水機を擔いで

第三野病
衛生伍長　朝留　吉雄

我が六師團司令部が　一日でも一刻でも早く目的地に到り任務を達成せんがため　廣德から山越えをして進出した時のことです

私達給水班員は二手に分れ　一手は沪水車と共に大道を進みながら各部隊の給水につとめ　他の一手は隊長殿以下十名　手押沪水機二台と共に山越えをし　師團司令部にも給水しやうと　後について出發となりました

手押沪水機一台は　重量二十二貫　附屬品共二十五貫以上あり　一台の手押沪水機を四人で擔ぐことになつて居り　附屬品及携帶糧秣　各人の裝具等のみでも　私達十人では持ちきれないのであります

そこで歩兵四七から十六名の應援を得て第一日の山越えにかゝりました

山越えですから無論大きな道はなく　四人で担ぎ進むのには　余りにも狭く　小さな小溝をとぶのにも　一人身と違ひ　却々骨が折れました

午前中は樂々と奏進出来ましたが　夕方に

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

なると皆宿が腥れて 十分間行くのにも一生懸命でした 交代の時間が短くなりだした 交代と言っても 担がない者は 担ぐ者の裝具等持たねばならないのです
第一日目から 急行軍する師團司令部の後に続くことも出来ず 夕方暗夜迄エッサ〳〵の掛声揃へて進みましたが 到々司令部の宿營地まで着かないうちに道が判らなくなり 或無名部落で夜を明かしました 隊長殿が連絡から帰られてからの話に依れば 司令部は約二粁前方に宿營してゐるとのことでした
第二日目は 早朝南京米のポロ〳〵飯を食つて 師團司令部に追付かうと出発したが 司令部も早朝出発してしまひ それも無駄でした
今日からどうしても 土民を探して 沪水桜だけでも担がしてやらねば 此の調子なら大変だと皆思ひました そして行く〳〵道々の家を探したのですが そこには誰一人居ないで 逃げてしまつて向ふの山の上から見てゐる様は 腹立たしい限りでした それでも 熱心に探して行くうち 五六名探し出して 幾分楽になりました
逃げおくれたのでなくては手に入りません 捕へるとすぐ跪の真似をする者あり 頭を地につけて哀願する者ありですが 決して殺すのでもなければ いぢめるのでもなくたゞこの沪水桜を運ぶ手傳ひをしてもらへばいゝのです しかしこんな偽跪などでも半里と行かぬうちに この重い沪水桜を担がせると 跪のまねどころではなくなるのは請合でした
夕方までには二十五六名の苦力を探して 交代させ乍ら どん〳〵進みました それでも司令部に追つくことは出来ず 日没頃

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

になると苦力も疲れたと見えて 小石に躓き 何回も 二十二貫の沪水機を投げました

其の夜は十時過ぎまで行軍して 十三里位歩き 或部落に宿営しました 苦力二十五六名は一個所に集め 或は家に入れて 私達が苦力の飯まで炊いて與へねばならないのでした 近所の家から米を探して来てぢき傍にある濁り水のクリークで洗ひ 一時間の後には準備が出来ました 釜もなくて 実はバケツで炊きましたから 良い飯は出来ませんでしたが その半煮飯でも 終日働いた苦力達に先づ與へやうと苦力を集めると 驚きました 家の中に居るとばかり思つて居た苦力が一人も居ません 私達が飯を炊く傍に居た苦力がたつた三名居るばかり しかもその三人たるや ロートル(老人)とショーハイ(子供)です

あゝ又明日の行軍が気にかゝる 炊いた飯も踏み散して 皆悲観しましたが 何と言つても後の祭でした これに懲りて 明日から苦力番をきめて厳重に監視することにしました

夕食のおかずは 途中で捕つた鶏の足が一本づゝ 焼鳥片手でうまいこと

第三日目はやつと本道に出ましたが 沪水機を担がねばならない 今日は肩に丸木を當てたばかりで痛い 腫れてゐるからです 進む道々苦力を探して 正午頃には又二十名以上集めました これで又楽になりました 司令部にも追つきました 今度は休憩の時も休まず苦力を監視し 便所に行く時もついて行きました

畫頃隊長殿の命で 昨夜泊つた宿舎まで忘れ物を取りに 一人引返すことになりました 約五里位の道でせう 然し山越えの

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

時には　何回も担いでやった自轉車が　今度は私を載せてくれました　昼食入の飯盒を一つ積んで　今来た道を後返りました

とある街にさしかゝりました　附近は師團の通過後で　日本兵の姿は一人も見えません　避難してゐて　あちこちから今帰つて来たばかりの土民が　ウヨ〳〵して居ました　そして燒けてまだ煙の立つ我が家で大声を張り上げて泣いてゐる者もあり　荷物を担いで来ながら　日本兵の私を見るなり　慌てゝ逃げ惑ふ者もあり　そんな様を見るのは気持のいゝものではありませんでした

中でも　家の廻角で　ヒヨツコリ出逢つた土民が　肩にしてゐた荷物を投げだして逃げ行く恰好は　まるで芝居か活動でも見るやうな滑稽な眺めながら　実はいやァな気がしました

やがて日本兵一人だと見るなり　四五十米の所まで逃げたまゝ　立止つて怪い目で皆見てゐる

丁度其の時岐れ道にさしかゝりました　右か左か一寸見当のつかぬまゝに　自轉車を下りて止りました　着いてからにしようと思つて食べずに居たが　ひどく腹がへつて来ました

日本兵一人と思つて安心したのか　彼等は少しも逃げない様になつたばかりか　近づいて来ました

支那語を知らぬ自分が　あやしい支那語で道をきいたが　判る筈がありません　左の方に居る奴が　右の方だと指さしてくれました　自分の方に来られぬためでした　然し自分でも右の方だと思つてゐたので　右の方に四五米行つた時　二三十米も向ふに居た一土民が　左だ〳〵と馴れ〳〵しく自

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

分のすぐ後にくつついて来ました 見れば便衣隊風の怪しい服装です うす気味悪く思ひ

「ニイ ライ プシンぞ」(来るいかんぞ)

と言へば止まるし 私が進めば又やつてくる 「プシン」と言へば又とまる 愈物騒で うつかりすると捕虜になるぞと不安になり クルリと自轉車の向を換えました

その男は二間ばかり横にとびだしました

引返して街を出た所でホツト息をつき 早速小高い丘の上で飯を食べましたが 腹のへつた割に食べませんでした

それから 川添ひの廻り道に出て 宿舎まで行きました 途中幾人も逢ひましたが 向ふから逃げてくれて 思ふ存分自轉車を走らせることが出来ました

宿舎に着くや休憩もせず 用を済ませて直に又引返しました 五里の道を往復すれば十里です 自轉車ではありますが 其の間には部隊は何処まで進んで居るか判りません 部隊と別れて引返した地点もすぐ道ははじめてのところになりましたが 大気を十分吸つて 大道を自轉車で疾走しました 部隊の姿どころか 日本兵一人も見えません

水がほしくてたまらないので 老人の一人居る家に立寄り

「茶水進上」

と頼んだら 幸に大きな藥罐に一杯濃い茶が入つてゐましたので それを遠慮なく全部呑んでしまひました その代り晝食の残りをくれてやりました

やつと前方に日本兵の姿を認め スピードを出して追ひついてみると よその師團でした 「六師團は」と訊いたが「知らぬ」と言ふので さては進路が違つてゐるので

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

はないかと心配しましたが 思切り進んで
みました 夕方になつて 薄暗くなつた時
四五間先に 日本兵の落伍者らしいのが
自轉車の来るのも知らず 危く突き当りさ
うになつたので ヂリン〳〵と鳴らした
驚いた彼は 便衣か土民かどにかく支那人
でしたが グイと引返し 走る〳〵 まるで
足より頭が 三尺位前に突出たやうにして
横に逃げだし 十五六米の所で跌いて バ
ツタリ倒れたのを横目に見て どん〳〵ペ
タルをふみました
まもなく六師團の輜重隊に追ついた時のう
れしさ 「司令部はすぐこの先」と聞いて
ホツと一安心も二安心もしました
司令部に追付き 給水班を探しました 進
軍中ではありましたが 隊長殿もとまられ
て 非常に楽じて居られたところで 無事
で帰つたのを 心から喜んで下さつたか

れこれ夜の十一時過でした
「まあ飯を食へ お前の分を炊いてあるの
だよ」
と言はれるまゝに 行軍しながら 苦力二
人で担いで行くバケツの山盛りの飯を 五
本箸で食ひながら歩きました バケツの飯
の山に 大きな穴があきました 自分なが
ら驚くほど食べました 生れて初めて知る
飯の味でした
其の夜は夜明けまで 連続十八里の行軍で
した

隊長殿も患者の小便の世話

第四野病　　嶺子 衛生小尉

上海上陸後南京に向ふ追撃は 実に凄絶た
るもので 上海の軍司令部に連絡したら

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

目下六師團は松江附近に在りといふ そこで非常に急いで松江に達すると 既に出発して所在が判明しない 途中到るところたづねても不明です 連日の行軍に兵馬は疲れ 一日は滞在といふ呑気さです

途中「南京はおちた」とか 「総攻撃は明日からだ」とか 全く前線の情況は判らず

第三野戦病院と前後して追及しました

我病院は行軍病院の名の如く 行軍力に於ては歩兵にも負けぬ位の自信がありましたが 実際に於て後続部隊は常に遅れがちでありました 但し上海からの軍用道路はコンクリート張りであつたのと 長く船に乗つてゐた関係で 多数の膝関節炎を発見しました

糧秣補給所も所々ありましたが 大部分現地徴発でした それでも物資は非常に豊富でした

愈〻東霸に到着して 南京城攻撃の迫つたことをきかされました 丁度夕方で 皆種々の御馳走を作つてゐる時でしたが 如何にかして隊の一部を前線に送りたい考で第三野戦病院に自動車便乗を依頼しましたけれども 乗せてくれず（當隊は當時自動車がなかつたのです） 詮方なく百方奔走しましたが たゞ焦慮するのみでした

折よく其時前線へ行く弾薬積載の自動車が来ましたので三拝九拝して 一部の衛生材料と庶務主任以下十一名を便乗させて貰ひ闇の中を走りだしました

途中空腹で〳〵たまりませんでしたので甚だ悪いこと乍ら 積載品中に粟の砂糖漬があつたのを少し失敬しましたが あの時の美味さと言つたら今に忘れません

自動車上は銃砲弾が頻りに唸り 小憩の時下車して小屋の中にねころべば 敵屍体を

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

祝にするといふ有様でした
さうして西善橋で師団通信に夜半到着連絡したら 非常に師団にも喜ばれ 速に前方に進出せよとの命を受け 本隊との連絡をとりました
当時 第一・二野戦病院の半部のみ進出 第三は私達より遅れて到着しました
翌朝(十二日)戦斗司令所と連絡しつゝ安徳門に向ひました 而してこゝに病院開設の命を受け 家屋の選定をし 主力の追及の速かならんことを念願しました この時 隊長殿が単騎進出して来られた時には涙の出る程うれしく力強く思ひました
患者は五六十名も引受け 設備なく 銃砲弾は雨のやう 患者は衰弱と飢餓を訴ふる者等あり 隊長と私と他数名で どうしよもなく困りました あの一時間余は 実に命が縮む思ひがしました

隊長自ら鑵詰殻を以て 患者の小便を取られた様は 今も髣髴として脳裏にあります
暫くして本隊中の健脚隊が進出し 休を止める間もなく 直に收療に当りました
始斯急追のため糧秣もなく 携帯口糧を出し 又江夏主計は 西方米を探し求め 自ら炊いて患者に給養し 連日米粒を食はなかつた患者達に大なる満足を與へた次第であります
此の地は野砲陣地の附近で 砲弾の炸裂・集中銃丸は トタン屋根を 豆をいるやうに叩き 警戒最も至厳を要しました 薄暮敵兵二名突入して来たのを補獲する等相当危険を感じ 應用ローソクの灯の下に 患者の処置に徹宵しました
以上のやうに 通信機関は持たず 又自動車等もない 小部隊が 戦斗部隊に一週間もおくれて出発 第一線に追及 華々しく

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

働かうと言ふのには 幾多の困難と犠牲があつたのは申す迄もありません

英靈よ安らかに

第四野病
衛生上等兵　本田武

十一月二十三日上海に上陸　この日一般の外出を許可され　日本人町に行つて見ました　見る物聞くものすべて懐しい　木造建築の日本趣味　北支の土の家ばかり見て来た目には一層その感が深い

エプロン姿の小母さんを見ても　何だか思ひ切り甘えてみたい気がしました

十字路になつた所のそこ〳〵に　黒人の巡警が立つてゐる　それがみんな同じ顔　同じポーズなのには驚かされました

灰燼と化した民家　弾痕生々しい火上海を後に進発したのは　木枯すさぶ十一月二十六日の早朝でした

永い間の船内生活の後で　僅か八里の道も四苦八苦のありさまでした

松江といふところに露営しました　「コレラ」の流行地で　家屋内にやすむことすら出来なかつたのであります

金山に向ふ頃は　敵兵の残屍累々としてゐました　三里廟　嘉興　震卓縣を過ぎる頃は　足も馴れて来　自ら進んで先発設営にも出る元気が出て来ました

刈り手のない稲田は　あはれ水浸しとなり腐敗し始めてゐます　野良犬が遺棄された敵兵の死体を齧つてゐます　石を投げて犬を追ひました――何かしらふと胸にこみ上げてくる熱いものがありました

湖州　廣德　蘆平も一気に　溧水まで十一

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

里は 重苦しい天気のせいか 一寸ひどく 相
当落伍者も出ました
おもたい足を引摺つて 赤く濁つた河の水で チヤンポン米
を洗つて炊き 粉味噌おかずで 食べたのは夜の九
時もすぎてゐました 明日は南京迄十七里 健脚隊が
編成され 四十余名が先発することになりました
敷き散らした藁の上に戦友東君と一枚の毛布にく
るまつて 明日の行軍を空想してみました
午前二時 付内中尉殿の指揮下に 肌寒い明りを頼
に 蠟燭をふみしめて南門迄 発しました 途中芋を掘つ
て食ひ 大張を踏り 田の水もガブ〳〵飲みました
午後七時 安徳門外に着く 頃は 総を忘れたいもう
夢中でした 強行軍の 悲哀 給油所のもの すべて
悲壮な顔をした 歩兵部隊のもの 戦友互に 水筒
を 分けるのを見ては 感慨無量でした
着いて見れば 自動車輸送隊により もはや百名余り
の患者が 収容されて居ました 夕飯を炊くこと
すら許されず 又炊く暇も 乾麺包を齧

りつゝ 直に患者の収容看護に努めました 敵弾
は 病院前の山腹に炸裂します
私は清 氏川 井上等兵等と重傷病室の勤
務につきました 次から次へと運びこまれる患者
を何十名受持つてゐました
井上と二人 後半夜の不寝番について居た時のことで
した 一番隅つこの藁の上に 黙々としてねてゐた
腹部貫通銃創の 山田上等兵が 珍しくも
「衛生兵殿」
と呼びますので 行つてみると 彼は血に染んだ上
衣の胸入をさぐつてゐましたが 一通の手紙を取出して
「すみませんが これをくにゝ送つて下さい」
と言つて渡しました 「母上様へ」と書いてありました
三日目の夜から容態が急変しました
「水を……水を下さい」
と連呼します 其の夜突然
「お母さんに 逢はしてくれ」
と言ひだしました 涙さへ浮べて

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「お母さん　お母さん」
と絶に呼び求める山田の顔を見るとジッとして居られなくなりました　意識に私は自分の母の寫眞を出してゐました　重態の山田は朦朧として　空に手を上げしきりに何物かを求めてゐます
「山田君　お母さんだ　あつてくれ」
私は山田の手に高ぼけた寫眞を握らせました
彼はジッと其を見つめて　咽喉をゴクリ〳〵と鳴らして居ましたが　何時しか目焼した彼の眼間に一筋光るものが流れてゐました
自分は靜かに　山田のそばを離れてやりました
南京が完全に占領された報をきゝながら
彼は倉心の笑を殘して　あつぱれ　南京城外の華と散つたのでした
「永遠不滅の榮光を得て散華した山田上等兵の英靈よ　永久に安らかなれ」
と私達は心から祈りました　凝と見上げる夜空には　彼の魂のやうに青く星が流れ　十二月の寒月は皎々と冴え渡り　幽鬼むせび泣くやうな寥々たる戰野に　犬の遠吠えが身に沁みました
誰が唄ふか「流砂の護り」の一節が
男度胸ははがねの味よ
伊達にやさげない腰の劍
抜けば最後だ　命をかけて
指もさゝせぬ此の護り
高く　ひくく　黒い帳に覆はれた南京城外の寒空にひろがつて行く

輜六ノ一
輜重兵軍曹　勝目　實

人馬の死骸浮けりと知りてのむ水も冷たく
うまし南京に入る日や
ふき出づるおのが血潮に染まりつゝ尚も言
ひしはたゝかひのこと

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

臭い飯

第一野病　　迫田衛生軍曹

松江から南京に向ふ行軍途中　南潯附近に宿營した時の話であります

夜遅く部落に着いて　附近にあつたクリークの水で　飯を炊き　お湯も沸して飲みました

「なんだか臭いね」

と戰友と話ながら飯を食ひました　其の夜おてから少し腹痛がしましたが　大したこともなくよく眠れました

翌朝水汲みに行つた戰友が　水も汲まずに帰つて来ました　そして顔をしかめて　唾を何回となく吐出してゐるので

「どうしたんだ」　ときくと

「あのクリークを見よ」

といふので　何か変つたことでもあつたかと思ひ　早速クリークに行つてみました

ところが水面に二つ三つ何だか浮んでゐる

よく見れば　死んだ敵正規兵服をまとふた死体です　さては昨夜の飯やお湯の臭のもとは確實にこれだな　さう言へば何だか油のやうなものが浮いてゐたやうな気がする

いよ〳〵気持が悪くなり　腹の中で　なんだか虫が動くやうな気がして　唾きだしさうになりました

附近はどのクリークも二三人から六八名も浮んでゐるのが見え　激戰のあとが偲ばれました

抗日のダシに使はれ　おいしい飯が　ダシになるとは　因果もの

茅木部

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

忘れ得ぬ自轉車行軍

第一野砲　長田衛生軍曹

南京攻略戰途中は命令受領者として　自轉車で行軍しました　この折は設營も兼ねて居ましたが　何分梯團が先頭と後尾とは二里近くもあつたと思ひます　しかも其の最後尾が我が部隊であつた爲　先頭で命令を受領すると　それを部隊へ傳達する迄に一時間或は二時間を要しました

そして又引返して先頭に到着するのには三時間位は充分かゝるのでした

そのうちに宿營命令は既に終つて　梯團長の位置を探すうちに夜となり　暗くはなるし　遂く探して宿營の區處を受けて部隊に引返しても　命ぜられた部落の所在地が暗くて判らず寒さは寒く　何處かの部落に入らうとしても燒跡だつたり　他部隊が入つて居たりして　右往左往して居ると　部隊からは色々と請求されるし　追退谷まへたことも一度や二度ではありませんでした

又前進中自轉車が壞れたり　或は夜になつたりしては　自轉車は全く厄介なものでした　殊に泥土道路通過の際　下り坂は餘程いゝとしても　上り坂となつたら　もう之位困るものはありませんでした　背嚢さへ重い夕方　自轉車を擔いで前進したこともありました

豪華な設營も骨折損

第一野砲　山村衛生軍曹

郎溪鎮に入る折　大川軍曹等と　設營かため先發しました　ろくに小休止もせず　汗

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

だく〳〵で郎溪鎮に着いてみれば きすがに縣廳所在地だけあつて 家も立派なものが多い 此の際一番立派な家をと思つて探しました たやすく探し得まして 一生懸命で設營を始めました

嚴谷滿岡など附近から集かて

「今夜一晩は各人が部隊長気分で休まれるぞ」

と鼻高々としてゐました

然し待てども〳〵 部隊は来ません

「ハハア 我々が強行軍をしたから 部隊の到着までこんなに餘裕があるのだな」

と皆で語り合ひ乍ら お湯を沸したり 野菜を採つたり 釜を集めたりして きりのない設營の仕事をどし〳〵進めました

部隊の者が着いたらどんなに喜ぶだらうと思ふと 何の仕事も苦になりません

「御苦勞」

といふ戰友のあの一言が有難いかです

然し待てど暮せど来ず 遂に夜となり 餘かことに連絡者を出して見ました ところが部隊は二里位手前に露營してゐるとのことです がつかりして引返す足の重かつたこと。

水ケトに 大麥を詰め込んで

輜六ノ三
輜重兵伍長 赤田生吉

十一月下旬上海に上陸した私達の部隊は弾藥を滿載して 息つく暇もなく 先進輜重として 一路第一線へ追及しました

南京へ〳〵と進む部隊は道路に溢れる大混雜で 態ふに暇なく 窮るに家なく たゞ進日進夜の急行軍 數日にして松江 嘉興を抜き 湖州へと人も車もひた押しに進ん

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

でおました
此の附近は未だ古傾後日浅く　兵站線はも
とより絶くべき筈なく　上海出発当時の積
行糧秣は人馬慢共既になく　総て給養は現
地購資に依って充てられておました　殊に
馬量の如きは二瓶の大麥はおろか　小麥
の一粒すらなく　遠近に刈残された稲を刈
り取へるやら　粒を煮て與へるといふ状態
でした
北支以来の私の愛馬三号も　一日数十粁
の連続行軍に　こゝ二三日の間にめつきり
疲れ果へ　頭をうなだれて　呼吸は荒く
前半に引摺られて行く様な重い足取は全く
元気なく　見る目も痛ましい程でした
大陸の晩秋は早青葉の影を止めず　路傍の
雑草も悉く霜枯れて　一握の青草もないの
です
「三号よ　今に腹一杯お前の好きなものを

御馳走するから　暫く頑張ってくれ」
と物言はぬものに　物言ふ如く愛馬の
鬣を撫でながら　幾度となく頼んだも
のでした
特に班でも優秀な駿馬として　温和でしか
も力があるところから、弾薬も相当過重に
積載してあります　難路にでもさし掛ると
心は愛馬の上にのみ趨り　どうか無事で通
過してくれと祈る気持が胸一杯になり　手
綱持つ掌に意識に力がこもり　ハッと名
に還るとたんの気持は格別です
一番不憫なのは小休止の時でした　其の度
毎に　何か欲しさうな目付で　私の動作に
一一目を配り　鼻孔で小さく嘶きながら
二三歩小刻に寄りそってくる可憐さ
ですから暇さへあれば　自分の空腹も疲れ
も忘れて　先づ馬溜をさがすのに誰も
一心でした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

かうして湖州も過ぎ宜興附近での夕方六時頃の小休止だつたと思ひます　丁度本道から十米位離れた河辺の木の下に　珍しくも大麥が二掬位づゝ　所々にこぼれて居るのを発見しました　多分前進した部隊が大休止でもした跡でせう　それを見るなり全く吾を忘れて駆け寄りました

これを三身に與へたら　どんなに喜ぶこと

とだらうし

と思ひながら　眼を輝かし　一粒も見逃さないぞと拾ふうち　何時しか上衣のポケットには　約二立程の大麥が詰められました　夕方の馬糧はとう〳〵採しだせたと言ふ要塚の中に　出発の号令が響き　部隊は動き出しました

今日は久し振りで　身を慰ばすことが出来るのだと思ふと　自分の辛苦は忘れまして限り無い嬉しさがこみ上げて来る様で　自然足の運びも軽くなりました

居たゝ愛馬三嚴だ

稲六三　先崎利英

足は三ヶ月の北支の轉戰に大分馴れて行軍の心得もついてゐました　日は記憶にありませんが　其の夜の露營地と　愛馬を救ひ得た附近の蕎の影まで　今だにはつきりと瞼の裏に焼きついて　想出す度に後味のよい三年前の忘れ得ぬおもひ出の一つです

中支に轉戰して　やがて一月にならうとする或日　私の愛馬三嚴号は　過重積載のためと　来る日も〳〵連続の強行軍の疲労のため　十五時頃　段々のある大皷橋に

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

さしかかり　間もなく道路上に膝をついて
倒れてしまひました　善通寺小休止もな
がく　快復も望まれるけれども　強進軍に
移つてゐる今　そんな餘裕など夢にしたく
もなかつたのであります
止むを得ず予備馬と交換し　三厳を補助兵
に頼んで　自分は予備馬を気遣ひながら　日
暮近く宿営地に着きました　馬の手入をし
てゐますと　件の補助兵が来て
「君の馬は　部隊から二百米もおくれて又
倒れたので　起さうとしたがとても駄目
だつた　餘り部隊から離れてしまつて危
険だつたので　班長の命で　残念ながら
捨てて来た」
と言つて一疋の馬を渡してくれた時の　私
の失望落胆は表す術もないほどでした
「嗚ゝそんなことなら自分が交代してゐれば
よかつた　此処まで来れば　今晩中に日又

元気を快復したものを……」悔んでみたが
後の祭　しかしなんとしてもすてられぬ
忘れ得ぬ愛馬です　初陣の　西出陣の準
備の日から
「これがお前の活兵器だ　戦友だ　よく可
愛がれ」
ときかされて預つた我が輜重兵唯一の力で
す　今では其の日の疲れも　夕飼の愛撫に
忘れることの出来る自分が半身です
渡された藁を手に　とつおひつ救助法を考
へてみました――さうだ　自分が引返せば
よい　一時間半位前なら　遠くて八粁だ
殊に夕方の行軍は稍おそいのだ　必ず遠
くはない――と決心すると　疲も忘れま
した
夕飼を戦友に託し　班長の許に願ひ出ました
言ふ迄もなく三厳は過去に於て　極め
て優秀な馬でした　班長とても同じ思ひ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

意外に宿営地が近く　思案されてゐる所で
したが　何分にも敵中　危険性が多分にあ
る　又明日のために　馬糧が微発を了つて
人馬共に寸刻も早くやすませねばならな
い　踏躇の様子に　自分は一人でも――
と申し出ましたら　班長も意を決して
「よし行け　明日の準備の都合もある　補
助兵は一名やる　危いから気をつけて行
け」
命令を得た時のうれしさ　銃一発をたのみ
に　それこそ危険も疲労もうち忘れ　勇ん
で分遣つて来たばかりの道を辿りはじめま
した
部隊の最後尾を離れると　なれたとは言へ
敵の蹂躙死屍　戰死馬　疲労馬が點々と
してゐて　戰場の夜路は想像以上にさびし
た感気味なものです　敗残兵を警戒しなが
ら　唯ひたすらに一里余り来た時　三頭も

疲労馬は居ましたが　どれも三厳と違ひ
立つ気力もないものばかり
水を與へても呑まず　鼻もならさぬ　はつ
きり這ふことが判る　居ないところを見る
と　彼は他部隊に追付いて行つたのではな
いかと心配になつて　足は重くなるばかり
です
やがて八路道いと思ふと　朝からの長途行
軍の上に　夕食も取らぬ身は　俄に空腹を
覚えて来る　二人とも口にこそ出さぬが
半ば失望し　たゞ黙々と歩いてゐた　する
と突然行手の闇に
ヒヒン（
二声聞いたのは確に耳なれた声　思はず
「居た（　三厳だ」
叫ぶより早く　矢庭に二人ともかけ出して
ゐました　給れもない三厳です　しかも立
つてゐる　よかった（
ようなき

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

て居てくれた夢中で愛撫すれば　三嚴は
いつものやうに顔を肩に寄せ　さも待って
居たと言はんばかり
来てよかつた　やはり縁はあつた　別れず
にすんだ　ありがたう　と自分は心から戰
友と馬に手々に禮を言ひました
水も呑み　歩き出すと　いつもと何の変りも
ない
戰友のありがたさ
三嚴が疲勞馬の中にたつた一頭立つてゐた
あの姿を思ひ浮べる度に　言ひ知れぬ愛馬
への追憶が胸をつく
あれから滿戰一年八ヶ月　時秋の競馬会
戰の時　身に迫る砲弾を潜び　手当のかひ
もなく　つひに忠坊酷道で戰死したあ
の三嚴の姿が　今もあり〳〵と眼に浮び
ます

手綱　片手に握り飯

第六小三　　岩城　光雄

上海出発後私達の部隊は　道路に溢れる各
部隊を追ひ越し　急行軍をつづけました
馬は疲れ　人は疲れ　足の痛さは日にまし
加はり　小休止は僅か二三分　十五分の大
休止が毎日のやうに續けられました　僅か
な時間では馬も馬糧を食ひ終ることなく
馬糧袋を下げたまゝ前進しながら食ふし
兵も愛馬の手綱片手に握飯に塩を塗りつけ
て歩きながら食ふ有様でした
かうして疲れも忘れもけとばし　急行軍を
つづけ　南京城外の野砲部隊に追及　弾薬
を交換した時　私は皆会く蘇生の思がしま
した　そして言語に絶する急行軍の苦労も
心から楽しく語ることができました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp